

2025年5月25日 復活節第6主日礼拝メッセージ

「イエス様のお祈り」

牛田匡牧師

聖書 マタイによる福音書 6章 1-15節

今日は、皆で一緒に「主の祈り」と呼ばれるお祈りをしました。1880年に翻訳されたお祈りですから、今からもう150年近くも昔の文語訳です。プロテスタントの教会や、キリスト教主義学校では、この文語訳の「主の祈り」を行っている所もまだまだ多いようですが、カトリック教会や聖公会の教会などでは、聖書と同じように数十年おきに新しく言葉が翻訳し直されて来ています。そのような「主の祈り」ですが、何故そんなにも有名で、皆がこだわっているのかと言うと、それは今回の聖書のお話にありましたように、イエス様自身が一緒にいた人たちに、「祈る時には、このように祈りなさい」(7-9)と教えられたと、伝えられているからです。

イエス様が直接、「こう祈りなさい」と教えてくださった特別なお祈りだから、「主の祈り」という名前を付けて、昔から大切にしてきた、ということでしょう。私自身もキリスト教主義の学校で、この「主の祈り」を学びましたが、そもそも「天にまします」などという表現自体が、このお祈りを通して初めて知った表現でしたし、普段の言葉と全く違った特別感のある文言でした。しかし、先ほどお読みした福音書の中にもあったように、歴史の中を歩まれたイエス様が実際に人々に語ったことは、そのような非日常的で仰々しい、特別なお祈りではなくて、むしろもっともっと素朴で単純なものでした。

なぜなら8節にあるように、すべての命の創り主である神、「あなたがたの父は、願う前から、あなたがたに必要なものをご存じなのだ」という確信があったからです。そもそもこの「マタイによる福音書」6章は、イエス様が大勢の人たちに対して語られたいわゆる「山上の説教」(5~7章)の中に一つのお話として並べられています。そして、それらのお話を耳にした人たちは、どのような人たちだったかと言いますと、決して裕福で勉強ができる人たちではありませんでした。5章の直前、4章の24節には、「いろいろな病気や痛みを苦しむ者、悪霊に取りつかれた者、発作に悩む者、体の麻痺した者など、あらゆる病人たち」がイエス様の所に連れて来られており、それらの人たちに向けて、5章から始まる「山上の説教」は語られていました。

様々な病気に苦しんでいた人たちは、当時の社会の中では、祭儀的に汚れた罪人とみなされ、交際してはならないと律法で定められていました。ですから、彼らは自分たちの出身の村々でも、差別され、肩身の狭い思いを余儀なくされていたでしょうし、どこかに優れた医者や祈禱師、癒し人がいると耳にすれば、必死な思い

でそのような人の元へと赴いたのではないかと想像します。しかし、多くの場合、彼らの願いは聞き入れられず、その病は癒されませんでした。そのような生活の中で、彼らは「会堂や大通りの角に立って、大きな声で祈る」(5) 指導者たちや、たくさんの祈りの言葉を並べて長いお祈りをする人たち(7)の姿を、よく見てきていたのでしょう。そして、そのようなことが許されない自分たちを卑下していたのではないかと思います。しかし、イエス様は「そんなことはしなくてもいい」、むしろ「するな」と言われて、簡潔なお祈りを教えられました。

この「主の祈り」は、「マタイによる福音書」6章の他にも、「ルカによる福音書」11章(2-4節)にも記されていますが、どちらも今私たちが普段の礼拝の中で行っている「主の祈り」とは少しずつ言葉が違っているということが分かるかと思います。例えば、最後の「国と力と栄えとは、限りなく汝のものなればなり」「国と力と栄光は、永遠にあなたのものです」という「頌栄」と呼ばれる言葉は福音書の中にはありません。これは後の時代の教会が、付け足したと考えられています。同じように「主の祈り」の言葉自体も翻訳も、それぞれの国や地域、時代によって、それぞれの教会、指導者たちに都合の良いように、作り変えられて教えられ、伝えられ、祈られてきました。そのことを考えると、歴史の中で実際にイエス様が古代ユダヤの人々にアラム語で語り掛け教えられた内容とは、随分と異なっていたのかもしれない。それこそ14節15節の「もし、人の過ちを赦すなら、あなたがたの天の父もあなたがたをお赦しになる。しかし、もし人を赦さないなら、あなたがたの父もあなたがたの過ちをお赦しにならない」という脅し文句は、明らかにそれまでのイエス様の言葉とは言っている内容が逆で、福音書が執筆され編集され、それが伝承されていく過程で、後々の教会の指導者たちにとって都合の良いように書き加えられたのだということが分かる支配的な一文です。

また1880年訳では「我らに罪をおかすものを、我らが赦す如く、我らの罪をも赦し給え」と言われている言葉も、もともとは「借金」などを表わす言葉でしたから、口語訳聖書でも「負債」、新共同訳や聖書協会共同訳では「負い目」と訳されています。これも貧しさの中で借金せざるを得なかった人たち、また返済がうまくいかず、時に帳消しにしてもらわなければ首が回らなくなってしまうという人たちの現状を祈ったものでした。それを個々人の中の罪意識へと内面化させていったのも、明らかな偏りであり、誤りでした。

それでは、もともとのイエス様が教えられたと考えられるお祈りの内容は、どのようなものだったのでしょうか。大阪ミナミの繁華街である天王寺のすぐ隣に「釜ヶ崎」と呼ばれる元「寄せ場」がありますが、そこにある「ふるさとの家」の「労働者

のミサ」で行われている「主の祈り」を紹介いたします。「ふるさとの家」で活動されている本田哲郎神父が、釜ヶ崎の労働者の方々や、元労働者の方々との生活の中から、福音書をもう一度読み直し、歴史のイエス様が歩まれた世界、人々と共に生きられた姿から、分かりやすい解説をつけておられます。

司式者 世界中の抑圧されている貧しい人たち、低みから立つ人々の願いに合わせて、「主の祈り」をささげましょう。

みんな 天におられる私たちの父よ。

司式者 空の彼方ではなく、万物を支える見えない世界「天」において、人の世の低みから働かれる、私たちの父である神様。(詩 131、139)

みんな 御名が聖とされますように。(出エジプト 3:14、フィリ 2:11)

司式者 世の小さくされている者と共に働くあなたを、みんなが聖なる方と認めますように。(マタイ 25:45、28:20)

みんな 御国が来ますように。

司式者 御国とは、「解放と平和と喜び」の世界です。(ロマ 14:17)

私たちが、不足を分かち合うだけでなく、抑圧された人たちの解放を目指して助け合い、神と人を大切にする社会をつくっていきましょう。

みんな 御心がおこなわれますように。

司式者 御心、それは世の小さくされている者が優先されること。低みから立つ人たちが勇気をもって自分を表わし、連帯する仲間と共に歩みを起こせますように。(マタイ 18:12-14、10:40-42、25:40)

みんな 天におけるように、地の上にも。

司式者 「死んで天国に行けば……」という我慢と逃げの姿勢を捨て、天国に期待することをこの地上にも実現する努力を続けさせてください。

みんな 私たちの日々の糧を今日もお与えください。

司式者 あわれみや施しによってではなく、自分で食べて行けるように、今日の仕事を得させてください(マタイ 25:35、テサロニケⅡ 3:7-10)。働けなくなった時には、正當に福祉が適用されますように。

みんな 私たちの借りを赦してください。

司式者 私たちも自分に借りのある人を赦しています。私たちは家族や知人、そしてあなたに、大きな借りをつくったかもしれません。どうか私たちの借りも赦してください。

みんな 私たちを試みに遭わせず、抑圧するもの(悪)から解放してください。

司式者 低みから立つ人たちを「抑圧するもの」。それは、立場の弱い者を差別

する世間の仕組みと、世間に合わせて、自分を卑下してしまう自分自身。
「力は弱っている時にこそ発揮される」(コリントⅡ 12:9)、この言葉を
信じて、私たちも抑圧するものと対決し、みんなが解放されますように。

みんな アーメン

先ほど歌いました 1954 年版『讚美歌』308 番は、もともと「祈りとは何か」という質問に対する答えとして作られた歌詞なのだそうです(『讚美歌略会 歌詞の部』)。教会で、人前で、立派な言葉で、格好の良くお祈りできる人は素晴らしい、と思われるかもしれませんが、もともとイエス様の周りに集まって来ていた人たちも、無学で、病気や障がいを抱えた人たちでした。いつでも元気に祈れるわけではない。祈りたくても祈れない時もある。1 節はそのことを歌っています。「祈りは口より出で来ずとも、真の思いの閃くなり」。パウロもまた言っています。「私たちはどう祈るべきかを知りませんが、霊自らが、言葉に表せない呻きをもって執り成してください」(ローマ 8:26)。祈れない時があってもいい。言葉にならない呻き、それ自体で構わない。なぜなら神は「願う前から、あなたがたに必要なものをご存じなのだ」(マタイ 6:8) から。また 2 節の「祈りは幼き唇にも、言い得る、た易き言の葉なり」も同様でしょう。難しい言葉でなくてもいい、小さい子どもたちの簡単な言葉で構わない。むしろまだ言葉を覚えていない赤ちゃんが、その保護者、養育者に信頼をもって全身を委ね任せきっているように、言葉ではない祈りであってもいいということなのだと思います。

「お祈り」は、自分の内面深くや、遙か遠くの天高く人間を超越した存在へと意識を集中することで、私たちが生活している現実から目を逸らすことに目的があるのではありません。それではカルトと同じになってしまいます。むしろ、様々なことに心騒がされている自分自身から、一旦距離をとって離れて、神様と自分との関係、神様の御手の中に抱かれている自分の存在を確認して、だからこそ信頼をもって、もう一度ここから歩み出せる、勇気をもって踏み出せるというもの。あくまでも心を落ち着かせて、この現実世界に還ってくるためのものであるはずです。そこには人と自分を比べる必要もありませんし、「良いお祈り」や「立派なお祈り」とは何かを議論する必要もありません。

イエス様が教えられたと言われているお祈りの言葉を、きれいに覚えて暗唱できることが大事なのではなく、イエス様がその身をもって、生きられたように、私たちも共にいてくださっている神様に助けられながら、信頼をもって歩み出せること。それこそがイエス様の教えてくださったお祈りの姿なのだと思います。